

個が生き生きと輝き集う、多縁社会ニッポン

- 21 世紀を担う人々へのメッセージ -

1996 年 4 月 26 日

目次

- . 個は自立したのか？
 - . 21世紀に向けた新たな縁のあり方
 - . おわりに
-

. はじめに

サヨウナラ 電光板の文字がやみに浮かぶ・・・
日本人にとって国をあげての大事業は終わり、メダルは渡され、
幕は下ろされた・・・
メダルはだれもが取れるものではない・・・
だが、雨宿りしていたらカサをさしかけてくれた少年、
レインコートを脱いで貸してくれた青年、
チップをとらないタクシー運転手、
笑顔のエレベーターガール・・・
さようなら、美しい、親切な国、日本。
私はこの国全体に金メダルを贈りたい。

『シンプル・グッドバイ』 ジム・ミューレー

1964年、アジアで初めてのオリンピックが開催された。世界中から多くの人々が集まり、このオリンピックに感動し、美しい日本に、そして親切な日本人に心動かされた。

あれから30年、日本は随分と変わった。経済力では世界第二位を誇るようになった。しかし、国民一人一人は本当に生き活きと輝いているだろうか。日本人としての拠って立つところを忘れかけてはいないか。このままでは日本人はどこへ行ってしまうのだろうか。しかも変化の流れは非常に激しい。

もう一度思い出したい。もう一度とり戻したい。自然に輝いている一人一人の日本人を。世界から拍手をあげた我々を。

当提言は21世紀にあと5年、経済同友会の設立50周年という節目の年にあたり、我々20世紀の企業経営者から21世紀を担う人々に贈る自戒と自省を込めたメッセージである。

日本という国全体が再び金メダルを贈られるような国になることを願い、それを具現する人々へのメッセージとしたい。

* 1995年1月15日付朝日新聞

米国のスポーツライター ジム・ミューレーが東京オリンピックの閉会式の際、印刷して “Simple Goodbye” からの抜粋。

・ 個は自立したのか？

我々経済同友会は、過去に様々な提言を社会に問うてきた。それはいわゆる政策提言にとどまらず、社会のあり方そのものに関わるものにも提言を發してきたが、特に21世紀に向けての、企業と個人とのあり方には積極的な提唱を繰り返してきた。例えば『現代日本社会の病理と処方』*1では、個人を活かす社会の実現を、また『個人と企業の自りつと調和』*2では、日本型雇用慣行の中長期的展望について、個人の自立と企業の自律を提唱した。さらに、第10回企業白書*3では、「人」創造の経営と題し、個と組織の共創(Creating Together)を提唱した。一貫して戦後の企業中心主義を是正し、企業からの個人の自立と、両者の調和のとれた関係を唱えてきた。

しかしながら、その関係は本当に変わったのか。個は自立したのか。勿論いくつかの歓迎すべき変化の兆しは見られるが、まだまだ充分とは言い難い状況である。

なぜ企業と個人との関係は変わらないのか。また、企業と個人の関係だけではなく、集団同士の関係のあり方も変わっていないといえるが、それはなぜか。我々は2つの要因を挙げたい。一つは、我々を含め国民一人一人に、変革、改革への恐れがあるということである。もう一つは、変革への恐れも含めて、将来に向けての進むべき座標軸がはっきりしないため、自らの行動に対し自信をもつことができないことである。後者は、前者を克服する過程で解決できるものと考えるが、前者は、長い歴史を経て蓄積された日本人の普遍性ともいえるものが、マイナスの方向に機能してしまっていることが原因であるように思われる。

*1 1994年6月「現代日本社会を考える委員会」(委員長:宮内義彦)

*2 1994年5月「労働委員会」(委員長:山口敏明)

*3 1992年3月「企業動向研究会」(座長:小林陽太郎)

(1) 縁社会の弊害

日本人は古来“結びつくこと”を大事にしてきた民族といえる。いわゆる“縁”の尊重である。血縁、地縁、水縁と特定の価値基準、条件を同じくするものと結びつくことに価値を見出してきた。この結びつくことの強さは、一つの集団を統率し、運営していく上

で、極めて有効なものといえる。しかし一方では、自分の集団の価値基準、利益を最優先に考えるあまり、他に対しては縁を閉ざしてきたともいえる。つまり、同質なものの縁のみを追求し、異質なものを排除する性質をもってしまったのである。

特に昭和30年代以降の“職縁社会”は、その傾向を強くしたといえる。職縁社会とは、単に企業中心の社会を意味するものではなく、職場としての集団優先の社会であり、かつ職という単一的な価値基準に縁が閉ざされてしまっている社会である。職縁自体は否定されるべきものではないが、唯一の縁となってしまったために、様々な弊害を生み、社会の変革、個の自立を阻害してきたと言える。個々人は、職縁の中でしか自己実現することができず、そこから外れることに不安を感じ、その閉鎖性は、さらに閉ざされた秩序、規範を生んでしまったのである。今日のそうした職縁社会をつくってしまっただのは、我々20世紀の企業経営者達であり、行政官庁や、政治や、教育界等のリーダー達である。今日の単一的な縁を断ち切り、その縁を離れても個が生き活きと輝くことができる社会を形成しなければならない。

(2) 縁社会の功德

しかし、日本人のアイデンティティとも言える縁には、我々が誇るべき良さがある。それは、日本人の結ぶ縁は信頼関係、互惠規範によって結びつくものである、ということである。この信頼関係、互惠規範をもった結びつきが、個々人が集団内において相互に利他的行動を期待する中で、共生の理念、モラルの高さ、徳、規律等を生んだと言える。また、信頼関係があるからこそ、社会調整コスト、および労力を大幅に軽減することができ、外に対しては競争優位の源泉となり、内においては目標の短期間で達成を果たすことができたのである。

日本が明治維新以降極めて短期間に近代国家の仲間入りをすることができたのも、戦後の奇跡とも言われた成長を成し遂げ、ある意味で世界の範となり得たのも、この縁の功績によるところが大きいと言えるのではないだろうか。

また、日本人の考え方(思想、文化、宗教観等)の基本となっている神道の自然観、仏教、儒教といったものが、相矛盾し、葛藤することなく柔軟に受容されてきたのも、ものごとを緩やかに結びつけるという縁の特徴があったためとも言える。

(3) 縁の良さを活用するための基本要件

我々は今、日本人の縁社会が本来もっている良さを再認識し、縁を21世紀に向けた日本の社会的資産として、プラスの方向にその機能を戻し、活用していくことが望まれる。そのための基本要件として下記の2つを提唱したい。

個の自立

縁の良さを活用するためには、強固な職縁の中に閉ざされている個を解放し、自立させなければならない。そのために個は、集団に対する関与の方法を、従属、帰属から、自らの意思、判断による所属、参画に変えていく必要がある。また集団も一つの閉ざされた塊としての存在から、共通する縁によって結ばれた個々人の集合体となり、かつ開かれた存在になるべきである。その中では、縁は個々の主体性に基づいて相互に選択される関係の中に結ばれ、集団と個が緊張感をもちながら共存し、どちらか一方の利益ではなく、相互の発展が目指される。閉ざされた縁の中での自立は、真の自立とは言い難く、縁のマイナス面が強調されるだけである。

ここでいう個の自立は、個の自己主張、オリジナリティを無原則に受け入れることを意味するものではなく、ルールの確立が併せて求められる。個々の構成員がその集団における自分の役割を充分認識し、集団を支える機能としての自覚を持つことができれば、我々が提唱し続けている自己責任原則は、互惠規範の延長線上に生まれてくるものと期待したい。

個の“才”の創造

21世紀はもはや情報社会を超えて知的社会へ移行すると言われている。かつては“知っていること”自体に価値があり、“知識”そのものに価値があったが、情報関連機器の普及とインターネットに代表されるネットワーク・インフラの整備により、世界中に広がる膨大な“知識”を個々人が容易に入手できるようになってくる。そうすると、膨大な知識の中から何を選択し、加工するかという行為、およびその行為によって自己実現のための有効な手段となったものが個の“才”として、価値を持つようになっていく。個が自立し、縁の連結点となるためには、こうした才を身につける必要があり、自分は何ができるのか、何をしたいのかという明確な意思表示をするべきである。また集団は個の才と調和する新たな知の創造に取り組む必要があり、その両者は、影響し合い、共に進化していくことが望まれる。

また、個の才の創造とは、特定の才能や能力を高めることだけを意味するものではなく、人間の内面、人間性を磨くこと、また、真の意味での経験、ノウハウの蓄積をも意味する。それはいかに情報関連機器が普及し、ネットワーク・インフラが整備されても、決してそれらに置き換えることのできないものであり、その重要性も我々は認識し、正当化していきたい。

・21世紀に向けた新たな縁のあり方

(1) 多縁社会の形成

縁のもつ相互信頼、互惠規範によって結びつくという特徴を活かし、再び世界の範となり得るような、個が生き活きと輝く社会を構築するためには、今日の縁の単一性を打破し、多元的な価値基準によって、自立し、才をもった個が、あるいは開かれた集団が多層的に結びつくこと、すなわち“多縁社会”の形成が望まれる。多縁社会とは従来の血縁、地縁、職縁に置き換わるものではなく、それらを包摂し、さらに知(知縁)、情報(情縁)等の新たな縁の基となる価値基準を受容する社会であり、それ故、新たな秩序と価値の創造を生む社会である。

今日、インターネットに代表される物理的なネットワーク・インフラ、インフォメーション・テクノロジー等が革命ともいべき様相で普及しつつあるが、このネットワーク・インフラは、従来の縁、すなわち社会ネットワークを補完し、強化し、新たな縁を創出する可能性を秘めていると言える。しかし、ネットワークを軸にしたバーチャルなコミュニティが社会的意味をもつためには、既存のコミュニティと同様にそこに信頼関係が求められる。つまり、既に世界を覆いつつあるネットワーク・インフラは、社会的秩序をネットワーク上に構築できてはじめて、既存の社会を変革する大きな可能性をもつことができるのである。

しかし、このようなネットワークの中を行き来する情報は、あらゆる規制を飛び越え、国家あるいは集団によって閉ざされた壁をつき崩す可能性を秘めている。それを新たな規制によって摘むべきではない。また縁という古来からの社会ネットワークが、どちらかといえば受動的であるがために、閉ざされた縁を形成しがちであったのに対し、この物理的な縁のインフラは、繋げるという意味を前提とした能動的なものであり、その能動性が既成社会の秩序を打破し、改革の原動力になるといえる。

このように、社会的、物理的な縁で繋がれた社会の中では、個々人は特定の集団への所属と、ネットワークへの参画という機会を得ることができ、その才を多層的に発揮することができるようになるであろう。

(2) 縁のグローバル化

国際社会においては、その恩恵の享受に相応しいグローバルなコミュニティ意識を持ち、日本の知や知識を開放し、また個々人も自らを開放して、世界の才とも縁を結んでいくことが望まれる。

21世紀は、国益、地域益の衝突による大競争の時代であると同時に、地球益という縁によって結ばれるグローバリゼーションの時代でもある。国益を超えた地球益に根

ざした国際協調の枠組みが模索される中、我々はグローバリゼーションと日本的価値観との調和をはかり、日本人の持つ信頼関係を前提にした縁というものの概念を、国境、民族、言語を超えた普遍性へと昇華させ、国際社会の安定と繁栄に貢献することが望まれる。インターネットというネットワーク・インフラによって、世界が物理的に結ばれつつある今こそ、精神面での結びつきを日本発信の縁によってとりもっていきたい。

我々は、工業生産物等の無機的なものばかりを世界に発信してきたが、これからは概念、価値観といった有機的なものも発信していくべきであり、そのことに対して自信と勇気をもたなければならない。

混迷の日本社会だけにとらわれていては、将来への座標軸はなかなか見えてこないが、国際社会の中で日本を見たとき、グローバリゼーションにおける日本の役割の中に、我々の進むべき方向が見えてくるのではないだろうか。

・おわりに

21世紀の社会は、個と集団がともに自立し開放され、多元的な価値基準によってネットワーク化された多縁社会であり、その中では才が刺激し合い、響き合ってあらたな自由競争による活力を生む社会である。

思えば、我々は確かに会社中心の単一的な職縁社会をつくってきてしまった。しかしそれは日本を世界第二位の経済大国に押し上げ、その目覚ましい発展は、奇跡の成長とも言われた。その過程において、個は集団に埋没し、自らの座標軸を見出すことができなくなってしまったのも事実である。しかし、敗戦のあの焦土での絶望感と復興への誓いを思うと、ここまでの道のりは、日本が国際社会における一員としての地位を築くための時間であり、集団優先の考えは、一つのやむを得ざる選択だった、とは言えないだろうか。しかし、時は流れ、社会は変わりつつある。個は多くの縁を求めだした。国際社会における日本の、あるいは日本人のアイデンティティの確立はまさにこれからなのである。次なる座標軸を確立し、個が生き活きと自立する社会の整備は、21世紀を担う者たちの大きな目標である。我々は次の世代に大きな期待とともにそれを託したい。

次代を担う者よ、自ら立ち、己を開き、変革を恐れず、他との共生、競争、共鳴の中で才を磨いて欲しい。そして、その才をもって自らの価値観、文化、国を異にする他に対しても縁を広げて行ってほしい。

集団のリーダーを自覚するものよ、集団の実現しようとする知、すなわち理想や夢が構成員である個の才の育成や発現を促進するような新たな知の創造を考えてほしい。

21世紀の日本が多くの縁で結ばれた社会になり、そこでの縁を求めて、才のある人々が生き活きと輝き集う国になることを希求したい。

アリガトウ…

私は再びこの国を訪れた。

何年ぶりであろうか。あのオリンピックが懐かしく思い出される。

随分といろいろな人が増えたような気がする。

そして、前とは違った誇りと自信のようなものも感じられる。

でも、あの時の感動は今も変わらない。

やはりこの国は美しく、あたたかく、なんと気持ちがいいのだろう。

ありがとう。

私は、もう一度この国に、日本人に金メダルを贈りたい。

20XX年 ある外国人の手記